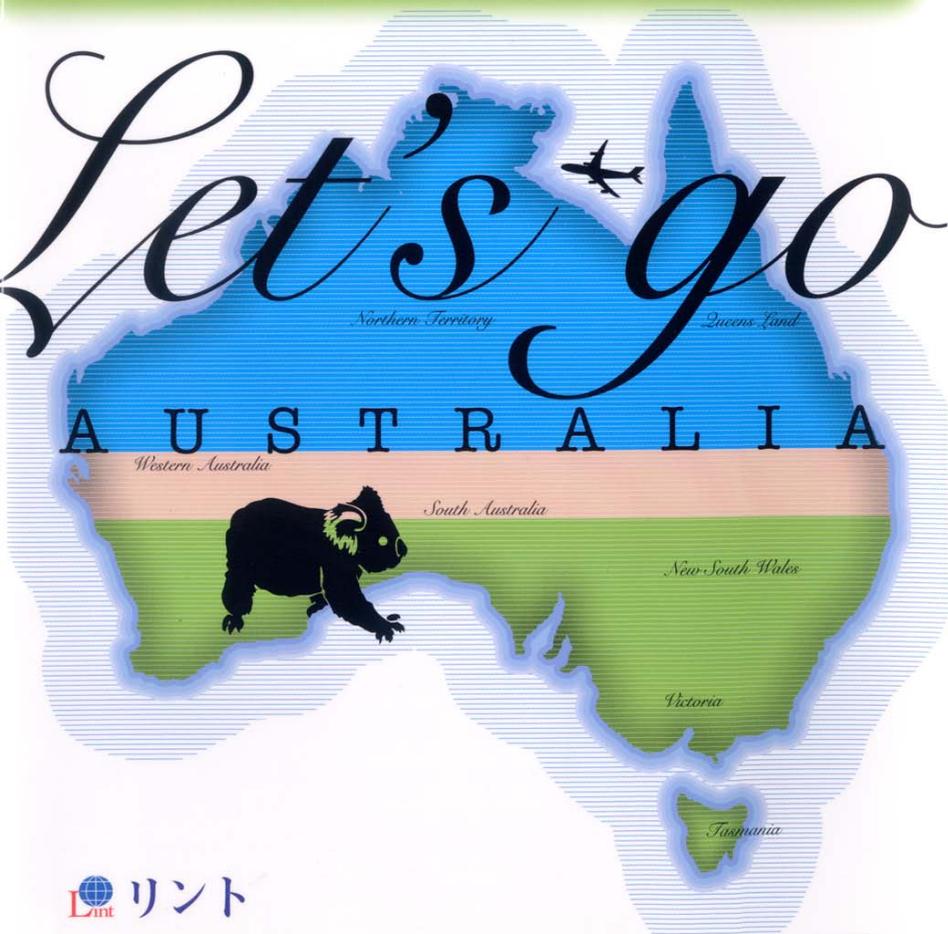
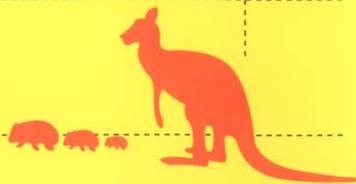


30のキーワードで読み解く

# オーストラリア

## トリセツ の取説

川野寛著



Lint リント

30のキーワードで読み解くオーストラリアの取説



川野寛著



ISBN978-4-902889-20-8

C0095 ¥1400E



9784902889208

定価 本体1400円+税

株式会社 リント



1920095014005

## オーストラリアを読み解く30のキーワード

### 歴史と文化に関するキーワード

- ・ Anzac Day
- ・ fair
- ・ heritage
- ・ indigenous people
- ・ prospector
- ・ royal

### 自然に関するキーワード

- ・ biodiversity
- ・ bush
- ・ cane toad
- ・ shark attack
- ・ sustainable

### 社会に関するキーワード

- ・ annual leave
- ・ citizenship test
- ・ compulsory
- ・ detector dog
- ・ removal
- ・ standard drink
- ・ TEE

### 人との交流に関するキーワード

- ・ caravanning
- ・ mate
- ・ round
- ・ school ball
- ・ street party

### 日常生活に関するキーワード

- ・ family business
- ・ flying doctor
- ・ public auction
- ・ savoury pie
- ・ Slip, slop, slap
- ・ smoke-free
- ・ watering days

はじめに

本書は一九九七年から二〇〇九年まで、英語学習誌 *TOEIC Friends* および『*TOEIC Test* プラス・マガジン』に寄せた原稿を基に、必要な個所に手を入れて単行本にしたものです。「海外リポート」というコーナーで、オーストラリアの文化・習慣や社会制度など日本人に興味を引きそうなトピックを選び紹介してきました。この雑誌への寄稿のきっかけは、雑誌の編集者の父親がわたしの友人であったことです。その関係で、当時オーストラリアに家族で住んでいたわたしに白羽の矢が立ったわけです。

わたしたち家族が西オーストラリア州の州都であるパースに住み始めたのは、いまから二十二年前の一九八八年のことでした。当時日本で勤務していた製パン会社が、パースにあるケーキ屋チェーン店に資本参加し、企画担当としてその会社への出向を命じられたのです。そのケーキ屋チェーン店に十二年間勤務したのち、個人会社をパースで立ち上げて日本向けの貿易を行いました。そ



して、五年ほど前からは、パース郊外にあるトマト栽培農家での勤務を主な仕事にしています。

オーストラリアを簡単に紹介する意味で、二〇一〇年に英国研究機関のエコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）がまとめた調査結果を見てみましょう。この調査は、世界の百四十の都市を対象に、「世界で最も住みやすい都市はどこか」を尋ねたものです。

下の表を見ると、わたしが住んでいるパースは八位。しかも、オーストラリアにある都市が四つも入っています。なぜそこまでオーストラリアの都市は人気があるのか、わたしなりに、その理由を考えてみました。

### ● 気候が良い

オーストラリアは、地中海性で、過ごしやすい気候の地です。夏は気温が四十度以上になることもあります。乾燥しているのが日陰に入るとあまり暑さは感じません。冬もほとんどの地域は

温暖で、霜が降りたり雪が降ることはめったにありません。

### ● インフラが整っている

都市部では上下水施設・道路・電信・公園などのインフラが整備されています。オーストラリアは車社会で、高速道路も市内を縦横無尽に走っています。高速道路は、もちろん無料です。

### ● 人々に親しみがある

人々の仲間意識が強く、職業・地位・年齢・性別・民族などに関係なく、望めばだれとでも友達になれる雰囲気があります。

### ● 国土が広い

内陸部は乾燥してほとんど人が住んでいないとはいえ、日本の約二十一倍の広さの国土に、日本の約十七パーセントほどの人しか住んでいません。日本より人口密度が低いので、家の敷地が広く、道路や公園なども日本に比べるとかなりゆったりとしてい



### 「世界で最も住みやすい都市はどこの？」

(二〇一〇年 EIU調べ)

- 一位 バンクーバー (カナダ)
- 二位 ウィーン (オーストリア)
- 三位 メルボルン (オーストラリア)
- 四位 トロント (カナダ)
- 五位 カルガリー (カナダ)
- 六位 ヘルシンキ (フィンランド)
- 七位 シドニー (オーストラリア)
- 八位 パース (オーストラリア)
- 九位 アデレード (オーストラリア)
- 十位 オークランド (ニュージーランド)

ます。

●自由でカジュアルな雰囲気がある

歴史が二百年余りと短いためか、しがらみや伝統から来る慣習が少なく、自由でカジュアルな雰囲気があります。大ざっぱでいかげんと言えなくもありませんが、生活する分にはそのほうが居心地良いように思います。テレビ番組の放送が十分くらい遅れるのは日常茶飯事ですが、これなど日本ではまず考えられないことでしょう。

●社会福祉制度が整っている

医療と高校までの教育は公立だと無料です。国民はもちろんですが、わたしたち家族のように、国民ではなくても永住権を持っているれば、国民と同じサービスを受けられます。

オーストラリアの良い面ばかり述べましたが、もちろんこの国

にも多くの社会問題があり、嫌な面を目にすることもありますが、でも、悪い面を上回るだけの良い面があるというのがわたしの実感です。しばらくは、居心地の良いオーストラリア生活を続けるつもりでいます。

本書では、オーストラリアを知るのに役立つ三十の話題を、英語のキーワードとともに紹介しています。内容はそれほど硬くないはずですから、気楽な気持ちで読んでください。本書が皆さんがオーストラリアを理解する手助けになり、またオーストラリアを好きになるきっかけになってくださることを願っています。



© Western Australian Government



# CONTENTS



## 目次

はじめに	iii		
<b>第1章 歴史と文化について知る</b>	<b>2</b>	<b>第4章 人との交流について知る</b>	<b>108</b>
1 戦争のことを思い出すAnzac Day	5	1 caravanningで老後をエンジョイ	111
2 fairを重ねるオーストラリア人	9	2 "G'day, mate!"で、みんな仲間に!	117
3 わずかなheritageも後世に残す	13	3 roundを経てひと回り大きな人間になる	123
4 孤立するindigenous people	19	4 school ballで社会人への予行演習	129
5 金と自由を求めるprospectorたち	25	5 street partyで近所と交流	135
6 royalを使えば「はく」が付く	31		
<b>第2章 自然環境について知る</b>	<b>36</b>	<b>第5章 日常生活について知る</b>	<b>140</b>
1 biodiversityを尊重する	39	1 農場経営はfamily business	143
2 あこがれのbush暮らし	45	2 非常事態に頼れるflying doctor	149
3 cane toadの侵略	51	3 public auctionで家を買う	153
4 思い出したころに起こるshark attack	57	4 オージーに人気のsavoury pie	159
5 大人も子供もsustainableを实践	63	5 "Slip, slop, slap"で皮膚がん防止	165
		6 どこもかしこもsmoke-free	171
		7 watering dayを気にする生活	177
<b>第3章 社会制度について知る</b>	<b>68</b>		
1 労働者にうれしいannual leave	71	あとがき	182
2 citizenship testが始まった	77		
3 選挙の投票はcompulsory	81	索引	187
4 検疫はdetector dogにお任せ	85		
5 将来有望なビジネスは落書きのremoval	91		
6 standard drinkを守って車に乗ろう	95		
7 TEE目前でものんびりしている受験生	101		

表紙デザイン 美澤 修(omdr)



## 非常事態に頼れるflying doctor

**flying doctor** — ロイヤル航空医療サービスの通称

辺境地域には、病院がなかったり、  
治療に必要な設備や医師・看護師が不十分な場所があります。  
そうした地域で病人やけが人が出たとき、  
飛行機で駆けつけるのが、flying doctorです。

## 「救急車ならぬ救急飛行機」

非常事態に助けに来られるものというと、皆さんは何を思い浮かべますか。パトカー、救急車、消防車といったところでしょうか。オーストラリアでは、これに飛行機が加わります。

国内の幹線道路を走っていると、下のような標識を見掛けることがあります。標識に書かれている英語は「この道路は、緊急時にRFDsが滑走路として使います」といった意味で、RFDsはRoyal Flying Doctor Service（ロイヤル航空医療サービス）という非営利団体の略称です。RFDsは、flying doctorの名称で、人々に親しまれています。

オーストラリアは、国土面積が日本の二十倍、人口が約五分の一（約二千二百万人）と人口密度が小さく、人口はシドニー、メルボルン、パースといった大都市に集中しています。都市部から数百キロも離れると、人口数百程度の町がたくさんあり、こうした地域では、とくに病院や医師、看護師の不足が問題になっています。病院があつたとしても設備が不十分で満足な治

療を受けられないこともあるのです。そんな場所で大けがをしたり病気になるたりと、非常事態に陥った人のために存在するのがRFDsなのです。

RFDsは、医師や看護師が患者の下へと飛んで行き、患者の処置を行います。必要であれば高度な医療機器が備わっている大都市の病院まで患者を搬送し、搬送中の応急処置も行います。電話などを通じて、医師のいない地域にいる人に、けがや病気への対処方法を教えるサービスなども行っています。

## 「flying doctorは資金難」

都市部から離れたところに住んでいる人々になくってはならない存在のRFDsですが、彼らは近年、資金難という問題を抱えています。

この問題については、新聞でもしばしば取り上げられています。たとえば、「RFDs、問題対処のために戦う」といった見出しで、RFDsが資金難から抜け出すために政府に働きか



▲ RFDsが所有する飛行機。この飛行機に乗ってflying doctorたちは、患者を助けに向かいます。 © Delemon



▶ 幹線道路を滑走路に使えるのは国土が広いオーストラリアならではと言えます。

けていることが伝えられています。

RFDSは一般家庭にも援助を求めています。わたしも、この三年ほどで二通の寄付を求める手紙を受け取りました。手紙には、帰宅時にオートバイでエミューという鳥とぶつかって意識不明になった人や、旅行時に脳梗塞になった人など、RFDSに助けられた人たちについての話も記されています。広いオーストラリアに住んでいると、いつこのような非常事態に出くわし、彼らのお世話になってもおかしくありません。彼らがいなくなると困るので、いくらか寄付することを考えているところです。



**Imagine being in an intensive care unit at 30,000 feet in the air!**

*This is a profession that around 11 people find themselves in each day. And so it's all off-duty as when something or someone 500 kilometers per hour.*

*Being on the Royal Flying Doctor Service provides the unique medical care 70 hours a day, 365 days of the year. It's a commitment that requires a special kind of courage and dedication. It's a job that's not just a job, it's a calling.*

*It's a job that's not just a job, it's a calling.*

*Each year the RFD Service provides medical care to over 100,000 people in remote and rural areas of Australia. It's a service that's not just a service, it's a commitment.*

**Yes, I want to help.**

Name: \_\_\_\_\_  
Address: \_\_\_\_\_  
City: \_\_\_\_\_  
State: \_\_\_\_\_  
Postcode: \_\_\_\_\_  
Phone: \_\_\_\_\_  
Email: \_\_\_\_\_

Please send me the RFD Service magazine and information on how to help.

I have already made a gift to the RFD Service.

**Royal Flying Doctor Service**

**We will be there when we are needed for people like...**



**Allen Dettin** who was a long way from his city home when his motorcycle hit a tree. Knocked unconscious by the crash, Allen was in trouble, especially as it was hundreds of kilometers to the nearest hospital. The health care team to help called on the Flying Doctor.

**Rosie and Peter Schaban** Married for 39 years, this retired couple had developed a love of travelling. On their last trip, Peter suffered a stroke. This young to wife spent time in hospital but had still with one, and Rosie. "Thank you Flying Doctor for saving Peter's life."

**Newborn Eddie James** With 14 weeks still to go, mother-to-be Julieanne James was worried when she went into labour, especially as she was a long way from a hospital that was equipped to manage a premature delivery. Without the Royal Flying Doctor Service, Eddie would not have made a safe entry into the world.



**We will be there now when we need you.**

▲ 活動資金を得るために、患者の談話を載せ、RFDSの必要性を訴えています。